
魔法少女リリカルなのは～孤高の黒き剣士～

眈篋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 孤高の黒き剣士

【Nコード】

N9474Z

【作者名】

毗篋夢

【あらすじ】

主人公は何の変わりもない只の高校生。そんな主人公はある日買い物に出かけ、その帰り道にひよんなことで死んでしまう。目が覚めたら……。これはよくあるとある転生の物語り、神様から貰った力で原作ブレイクをしていく。

No.01 終わりと始まり(前書き)

作者の初めての投稿で何かと至らぬところが多々あると思います
が、よろしく願います!!

楽しくやっていけたら良いと思います。

No.01 終わりと始まり

えっと・・・とりあえず目の前で
何が起こっているのかを整理しよう。

「で、あんた誰？」

そこは真っ白な空間で土下座をしている少女がいた。

おいそこっ！警察に電話すんな！！

「で、ここ何処？そんなもって、アンタ誰？」

「ごめんなさい、実は姉神様の机でモン3rdでイビ〇ジョー
を狩っていたら

気づいたら眠っていて、その・・・」

「・・・で？（もしかして・・・）」

「あたしのヨ〇レで汚してしまって、破けちゃいました。テヘッ」

「・・・やっちゃっていいよね？（怒）」

「ごめんなさー！ーいっ！ー！」

どうやら俺はこの少女のせいで死んだらしい。

「えっと、、マジかよ（汗）」

~~~~お亡くなりになる前~~~~

「たったく暇だよなー」

俺は余りにも暇だったので新作のゲームのチェックをしに、

店へと足を運んでいた。「友達と遊べば？」とか言う奴は許さん！！

「なんか面白そうなゲームあるかなー？」

店の中で約1時間ほど商品を見回していたが、

特に気にいるものが見当たらなかったのとおりあえず

帰宅をすることにした。

帰宅途中喉が渴いたので飲み物を買ひ、公演のベンチで休んでいるところ

目の前でサッカーをして遊んでいた子供達の

サッカーボールが道路へとびだし、トラックが来ているのに気づかずその中の一人の少年はつられるように道路に飛び出した・・・

「へ？」

「ッ！あのガキッ！！」

~~~~~

そっか・・・俺

あの子供をかばってトラックにひかれて・・・

死んだのか。

「ねえ、そろそろいい？」

「ん？ああいいぞ」

(何か俺を殺しやがった少女が何かいつてきてらあ)

「アンタ今凄く失礼なこと考えたでしょ(ジトツ)」

「いや・・・別に・・・ソナナコトナイヨ(汗)」

「まあいいわそんなこと」

(じゃあ言つなよ)

「早速だけど、アンタを転生させるわ」

「ん、転生つてあれか？あのもう一度人生を楽しめる的な」

「そうそうそれぞれ」

うわー。まさしくあれだな。うん。

小説やゲームだな。・・・テンプレキタ

(。。(

!!

「・・・話を戻すわよ」

「お、おう、」

「早速だけどあんたには「リリカルなんちら」って世界に逝つてもらうわ」

「ふ〜ん。・・・ちよつと待て、行かす世界の名前知らねえのかよ！

てか、行かすのとこ漢字違くなかつたか!!」

「あーうるさい。転生できるだけ有難く想いなさいよ」

(・・・あれ、コイツ最初とキャラ違くなえか?)

「あー。有難う」

「べ、別にアンタのためじゃないんだからね!!」

(ここでツンデレかよー)

・・・有りだな(。。(キリッ)

「そんで、何か能力とかつてもらえたりすんの?」

「え?ああーうん。できるわよ、何か要望とかあるわけ?」

要望?そんなの有るに決まっているだろが!!

「とりあえず・・・魔力・気力のランクEX。武道の心得。十二の

試練。

アニメや漫画の全能力使用可能・・・まあこんなもんで」

「・・・結構あるわね。全能力使用とかは多分・・・てか、絶対に制限とかあるからね。それと、容姿とかは？」

「まあ制限あるだろうな。容姿ねえ・・・主人公たちと同じ年で、見た目普通で、

髪は黒、目は緑で、身長は高め、体は細めでよろしく！」

「・・・こ、細かいわね」

「まあなあー面白そおじゃん？」

「ハア・・・まあいいわじゃあ送るわね」

「あいよー」

ここから俺の新しい人生が始まるのか・・・

「あ、言い忘れていたけど、生活とかは自分でしてねー」

「えっ！（。 ー ー）」

「バイバ～イ」

「待てこら幼女

・・・」

「・・・さーてイビ○ジョーの太刀作るぞー」

って！デバイス渡すの忘れた・・・まあいつか」

No:01 終わり始まり(後書き)

次回は主人公のプロピールを紹介させていただきます。

設定（キャラ紹介等）（前書き）

全く人気が無い作品ですが、よろしくです。

設定（キャラ紹介等）

主人公（オリキャラ？・登場人物）紹介

名前：冷氷 無月（れいひょう むげつ）

身長：134センチ

体重：34キロ

性格：あまり人を好まないが、困っている人には手を貸す。

能力：チート（多過ぎる）

魔法・気力：ランクEX

・剣が好きで近接戦闘を好む。

無月「・・・出鱈目だな」

作者「すまん、あんまりアニメとか知らないから知っている分フル活用させるには

これしかなかったのだ」

無月「・・・お前貧乏だもんな」

作者「おい、その痛々しいような人を見る目はなんだ？」

無月「いや、かわいそ・・・なんでもない」

作者「お前今明らかに「かわいそうだから」とかって言っつもりだつただろ！！」

無月「・・・フウ」

作者「溜息をつくなー！ー！！」

無月「で、こんな会話でいいのかよ」

作者「いや、実はお前と敵対する奴も追加する」

無月「敵対？斬っていいのか？」

作者「それは、今後の展開次第だな・・・まあ殺させはせんよ（笑）

では、モブキャラの御紹介〜」

無月「・・・（コイツ遊んでやがる）」

名前：高町 秀哉 （たかまち しゅうや）

身長：131センチ

体重：31キロ

性格：女に目が無い（特に美少女）。自意識過剰。自己中心。

能力：特になし

魔法：ランクSSS （気力は神に頼まなかったため常人以下。）

・魔力Ⅱ強さだと考えており、見た目と魔力量だけは良い。

無月「・・・」

作者「・・・」

無月「コイツさ、ランクSSSまでしか絶対知らなかっただろ」

作者「全くもって同感だ」

無月「しかも能力：特になしって・・・ただのバカだろ」

作者「まあいいだろ。つってもどうしよっかなー」

無月「何がだ？」

作者「いや、俺ってさ原作知らないじゃん。どうやって物語を進めようかと・・・」

無月「・・・よくそんなので小説書こうと思ったな」

作者「いやー。楽しそうじゃね？」

無月「・・・こいつもバカか」

作者「なっ！作者にむk」

秀哉「いやー諸君、御機嫌よう。この小説の主人公の高町秀哉様だ！！

ハッハッハー！！！」

無月・作者「・・・（うわぁー・・・）」

秀哉「どうしたんだい？愚民ども」

無月「チツ・・・おい作者、俺の武器はどうやって出すんだ？」

作者「ん？ああ。お前の影に出したい物を頭に浮かべながら手を突っ込んで

「来い」って出したい物の名前を言えば出せるよ」

無月「そうか・・・来い・・・斬月!!」

グワツ!!

秀哉「な、なんだその馬鹿デカイ刀は!」

無月「こいつは斬魄刀っていうんだよ。いくぜ。卍解天鎖斬月。

ぶっ飛べ、・・・月牙天衝!」

秀哉「え、ちよっ・・・う、うわああああー!!!」

ドッカーーン

無月「・・・(やっぱ刀はいいなノノノ)」

作者「・・・(さすがモブキャラ。扱いが・・・)」

無月「それでは、この小説を読んで下さっている読者様、続きはまた今度で」

作者「え!それは俺のセリフー!!!」

無月「早い者勝ちだよ。毗籠夢さん」

作者「んー。ならしょうがないな。では、また今度」

設定（キャラ紹介等）（後書き）

次回から本編に突入します。

原作を知らないので、原作崩壊引き起こしていきましょー！

転入生（前書き）

どーもー。全く読まれない小説の書き人眦篋夢です。
今回はタイトル通り、無月の転入日です。

転入生

無月side

(着いたか・・・)

そこは一室の部屋だった。

「まずは自分の能力をh「ハローツ」・・・」

「実はねえ実はn「どうせデバイスのことだろ？渡されていねえし」
・・・」

「むう~~~~まあいいけど。はい、これデバイス名前はアルフィン
でユニゾンデバイスだからね」

「・・・ああ」

「あなたが私のマスターですね。私の名前はアルフィンです」

「あー。マスターじゃなくて無月。俺の名前は冷氷 無月だ」

「了解しました。マスター無月」

「・・・無月だけで呼べよ」

「それじゃ私帰るねーばいばい」

「あーはいはいばいばい神様(幼女)」

「……ナニカイツタカシラ？」

「……何も言っていないです（汗）」

「さて、アルフィン学校に行くか」

「はい」

なのはside

今日は学校に来た時からいつもより少し賑やかだった。

「すずか、アリサおはよー」

「おはようなのは」

「おはよー」

「ねえ今日ってみんな騒いでいるけど何かあるの？」

「転入生だつてよこの学年に二人も」

「男の子かなー？女の子かなー？」

ガラガラガラ

「はい。みんな静かにー……よし。」

今日はこのクラスに男の子の転入生がやってきます」

生徒A「先生質問です！。その人はカツコイイですか？」

「うーん。かつこいいんじゃないかしら」

全員「おーーう」

「じゃあ無月君入ってきて」

コツコツコツコツ

「今日隣町から引越してきた冷氷 無月です。質問等は一切受け付けません」

人付き合いは苦手なのであまり関わらないでくださいよろしくお願ひします」

生徒B「おお、これは・・・／／／」

生徒C「なんか、Cool!!」

「では、無月君の席は・・・高町さんの隣ね。

分からないことがあれば、高町さんに聞いてね」

「分かりました」

「わ、私なのは、高町 なのはって言います」

「・・・ああ、よろしく」

(こいつ俺の今の自己紹介聞いてなかったのか?)

なのはside

(無月君こんなに露骨に嫌わなくてもいいのに)

・席について早々なのはから遠ざかる。

・なのはのことを無視(寝ている)。

・起こそうとしたら「うるさい」って言われるし。

(・・・はぁ(落ち込み中))

無月side

(なんなんだよこの魔王。俺の自己紹介マジで聞いていなかったのか?)

滅茶苦茶つかかってくるじゃねえかよ・・・ハア

「無月君・・・無月君・・・」

(うるせえ~~~~先生さんこいつをなんとかしてくれ・・・)

「ん?高町何を話している」

「ふえっ!いいえ、何でもありません」

「そうか・・・だったら金、銀、銅、水銀の化学式を答えろ(ニヤニヤ)」

「えっ!えつと・・・」

「・・・(カキカキカキカキ)」

スッ・・・

「え、無月君これを言えばいいの?」

コクッ

「どうした高町答えられないのか?」

「えっと・・・金 \equiv Au、銀 \equiv Ag、銅 \equiv Cu、水銀Hgです」

「!!!・・・いいだろう、座ってください」

「無月君、有難う!」

「有難うと思うなら、俺に関わらないでくれ」

「え・・・ごめんね」

「スースー（なんか高町の髪が垂れ下がった気がするぞ）」

（けど・・・私負けない!!!）

理科の授業中でした。

アリサの怒りと敗北（前書き）

無月「・・・なあ作者」

作者「ん？」

無月「このタイトル不味くね？」

作者「まあタイトルだけだし気にしなくていいんじゃないかね？」

アリサの怒りと敗北

無月side

(畜生、なんなんだよあの高町とアリサっていうやつ)(イライラ)(

~~~~~回想~~~~~

4時間が終わり、人々はみな、思い思いに御弁当を広げるのであった。

「なのはー御弁当どこで食べる？」

「教室？それとも屋上？」

「私は屋上まで行くの疲れるから教室がいいな」

(魔王と友達かける×2か・・・こいつらは教室で食べるらしいからな・・・)

俺は屋上で食べるか」

ガタッ コツコツコツコツ・・・

なのはside

「・・・・・・・・・・はぁ」

「どづしたの？なのは」

「いや、何でもないんだけどね・・・」

「無月君の事？」

「うん・・・理科の時間に助けてもらったから有難うっていったんだけど・・・」

「だけど？」

「「有難うって思っただったら俺に関わるな」って言われて」

「はあああ！！何あいつサツイテーーーー！！！！」

「ちょっとアリサ。そんなに怒らないでよ」

「いや、私あいつぶっ飛ばしてくる」

ガタッ！ タッタッタッーーー

「あーアリサ！！」

「すずか追おう！！」

「うん！！」

~~~~~回想終了~~~~~

無月side

ここは屋上の端の方のベンチ

一人の少年が弁当を食べていた。

(ふうー。ようやく一人になれた。今日は帰ったら能力テストだな)
そう思つて、食べ終わった弁当をかたずけていると。

バンツ!!

勢い良く屋上のドアが開かれた。

「あんたがなのはに酷いことをっ!!」

アリスは無月に殴りかかった……が、

「え？」

そこに無月は居なく、いつの間にかアリスは宙をまい地面に落ちた。

ドンツ!!

「うっ」

「なんだ……誰かと思えばバニ……女か」

「くっ、バニングスだ!! (全く見えなかった!?)」

「はぁ……面倒だな…… (これが武道の心得か……)」

「「アリサツ!?!」」

アリサ s i d e

(なんなんだよコイツ。殴りかかったときには目の前に居たのに気づいたら)

私が地面に叩きつけられて、あいつは私の後ろにいた)

「はぁ・・・面倒だな・・・」

(コイツッ!?!)

「「アリサツ!?!」」

「なのは!?!すずか!?!どうして二人がここに!?!?」

「どうしてってアリサが無月君のところを走り出したから」

「コイツは・・・私がやる!?!」

無月side

「コイツは・・・私がやる!!！」

(はぁ・・・やべえ・・・斬りたくなってきた・・・これ以上は無理だな)

「お前たち。俺は自己紹介のとき言ったよな、関わるなって・・・」

「だったらなによ!!！」

「ちよつとアリス!!！」

「はぁ・・・まあいいや。・・・興ざめだな」

コツコツコツコツ

「!ちよつと、逃げるの!?!」

「俺に一撃でも入れられなかったやつがよく言つぜ」

「くっ・・・」

「じゃあな」

「待って!!!!」

なのはs i d e

「だったらどうしたら私たちとお話してくれるの？」

「ちょっとなのは！こんな奴ほっとけばいいのに！！」

「・・・だったら、魔法でも使って俺を負かしてみな」

コツコツコツコツ

(魔法！？そんなの・・・)

無月s i d e

俺は正直うんざりしていた、

高町は俯き、バニングスは睨み、月村はチラチラ窺っていた。

そして下校時間

(さてと、さっさと戻って能力テストだ！！)

そして、無月が自宅で能力テストをしている頃、

なのは小さな宝石を携えたフェレットと出会っていた。

なのはがフェレットと出会い、

そして

この物語は

動き出す。

変態登場!?

無月side

「なあアルフエン」

「なんですか無月」

「俺の能力つてさ、お本当にチートだな」

「そう……ですね」

俺たちは今、近くの林に結界を張って

その中で能力テストをしている。

「やっぱボンゴレはいいよなー」

「無月?」

「いや、何でも無い」

今俺が使っている武器は……

(大空のリングVer.X……これは凄まじい炎だな……)

「ガウツ」

「ナツツ、カンビオ・フォルマ モード・アタッコ

ミテ・ナ・ディ・ボンゴレ・プリーモ」

「ガウツ!」

「え、ええええー!!!猫ちゃんがガントレットに!?!」

「あー、まあこういうものだから気にするなアルフィン」

なのはside

「これが……魔法」

「そうだよ、そして君には魔法使いの才能がある。
僕のために力を貸して欲しい」

そしてここでは、未来の魔導士エース

高町 なのはとそのデバイスレイジングハートが揃った。

無月side

(ふむ、何事かと思えば、高町が魔法使いに目覚めたか・・・)

「無月さん、取り敢えず道路とかを元に戻したほうがいいかと・・・」

「そう・・・だな。来い、タイム風呂敷　！！！！」

「・・・それはドラエム(それ以上は言うてはいけない!!)・・・」

「まあ、取り敢えず直すか」

なのはside

(この魔法を使えば無月君に話を聞いてもらえる・・・

まっっててね!!)

決意を新たにしたなのはだった。

無月side

今は学校、と言っても俺は寝ている。

(・・・よし、早退しよう!!)

思い立ったが吉日という訳で荷物を整理していると・・・

「無月君！ちよっとお話があるの・・・」

「……何のようだ」

「この前……屋上でした約束のこと覚えてる？」

「……ああ、お前が魔法でも使って俺に一撃でもあえたらお話しする
やる」

「っていう内容だったな」

「約束は守ってね」

なのはは真っ直ぐに見つめてくる。

「ああ、約束は守る」

そして俺は帰ろうとしたのだが、

「って！無月君！なんで帰ろうとしているの！？」

「暇だし、眠いし、面倒だから」

「でも、帰っちゃだm「いいわよそんな奴」あ、アリサちゃん！？」

「別に帰りたければ帰らせればいいじゃない」

「ちょっとアリサちゃんs「お前の指図なんていらねえ俺は俺で勝手にする」

無月君まで何言っているの！」

そして無月は早々と教室から出ていった。

「無月君・・・」

なのは何か呟いていたが、無月の耳には届かない。

無月は帰宅途中にある公園のベンチで考え事をしていた。それは、ジュエルシード集めをすぐに開始するか、それとも、戦闘能力をあげる訓練をするかという内容だった。

「ん？これは魔力反応か、月村とか言う奴の方からか・・・
ジャミングコートを着れば戦ってもばれないだろ」
そして無月は目的地へ向かった。

なのはside
なのは達の前にはジュエルシードを持った黒い格好の少女と使い魔らしき人物がいる。

「そ、そのジュエルシードを渡して！」
「これは、私たちに必要なもの・・・だから渡せない」
「それは危険な物なんだ渡してくれないか？」
「誰がアンタ達何かに渡すものか！！」
「なのは！俺も手伝うぜ！！」

私とユーノ君の前に見た目はカッコイイけど、何か目がいやらしい男の子が出てきた。

「俺の名前は高町 秀哉だ同じ高町どうし仲良くしよんぜ」

(ねえユーノ君)

(何？なのは)

(知り合い？)

(全く知らない)

「ちなみに俺様の魔力量のランクはSSSだぜ！凄いだろー！！」

「SSSS!?!?!」

なんか凄いけど目線がいやらしくて
嫌な感じの男の子が現れた。

月無side

(さて・・・フェイトがなのはとの仲が良くなるまでは

ボンゴレギア(VG)で戦って、その後ハヤテが仲間になるまでは
刀で戦うか・・・)

「ん？アルフィンなんだあの高町の近くにいるSSSランクの魔導
士は」

「分かりません、先程突然現れました」

「チツイレギュラーか・・・あいつ、フェイトに攻撃していやがる
な」

「どうしますか？無月」

「もち」

無月はリングと毛糸の手袋を装備した・・・

「さあ、初陣だー!!」
「はい!!」

????

「くうっ!!」

「フェイトー!!」

(私の前に現れた目線が気味悪い男の子は正直
魔力の使い方は悪いけど、魔力が高くて一撃が強い!)

「フェイト大丈夫かい!?!」

「うん、まだ行ける。バルディッシュ!」

そのとき私はあの男の子から目を離してしまい
気づけばあの子が撃ってきた魔法弾が私に当たるところだった

「フェイトー!!」

(やられる!!!)
思ったそう。けど、どこも痛く無かった。
ゆっくり目を開けると・・・

「ッ! テメエーは誰だ!!」

「俺の名前? そうだな・・・ボンゴレとでも名乗っておこう」

無月side

(あつぶねえー・・・もう少ししてフェイトに当たるところだったじ
やねえか)

「おい、テストロッサ怪我は無いか？」

「え・・・はい。怪我は無いです。助けてくれてありがとうございます」

「テメエ・・・俺の邪魔をすんのか？」

「ああ俺にとつてはお前みたいな変態は手に取る程じゃないが、

まだテストロッサには早いのでな」

「おいお前！フェイトがあんな餓鬼に負けるとでも言うのかよ!？」

「餓鬼？あいつはテストロッサと同じ年だよ」「消えろー！ー！ー！

ー！ー！」「チッ」

あの変態がいきなり斬りかかってきやがった。

「まあいいか。行くぞ変態」

「テメエ・・・殺す!！」

そして、変態（秀哉）VSボンゴレ（無月）の戦いが始まった。

無月はリミッターで魔法ランクEX Dまで落としている。

秀哉はリミッターは付けてないためSSS（付け方が分からない）

変態登場！？（後書き）

無月「あの変態め・・・」

作者「あれ？お前もしかして、フェイトにほ」

「極限サンシャインカウンターー！！」

「ふぎやあああー・・・」

無月「ではではさよならーの前に、」

「どうやらこの作者は課題やら仕事に追われるため

更新日時が遅くなります。では・・・」

無月・作者「良いお年を〜〜」

なのは・フェイト（私たちっていつになったらここに出れるのかな？）

無月VS秀哉(ボンゴレVS変態)(前書き)

作者「いやー前話ではいきなり斬りかかれて正直驚いたねー」

無月「別に・・・あいつ動き遅かったし」

作者「まあお前の設定がモロにチートだからなー」

無月「・・・(こいつが考えたんだよな)」

無月VS秀哉(ボンゴレVS変態)

無月side

「・・・おせえな」

(なんだこの変態。魔力が馬鹿デカイだけで戦術のパターンが少ない上に

直線的な攻撃に雑な剣術・・・舐めているのか?)

今はボンゴレ(無月)と変態(秀哉)が戦っていた。

(魔法弾と剣。少しは楽しめると思ったのだがな・・・)

「どうだああーこの俺様の力わよおおー!!!」

「黙れ変態。・・・そうだな、そろそろ飽きてきたしな・・・」

無月がそう言うと、毛糸の手袋が光り輝き、赤が重視されたグローブに姿が変わった。

「おい、テメエ・・・なんだそのグローブ」

「俺の武器だよ。変態」

「チッ!!!」

(相手の剣は・・・なぜに金色なんだ?)

そう、変態の剣は金色だった。

「死ねえええ　　!!!」

「・・・こいつ弱いな」

なのはside

突然現れた黒いコートを着た少年。

魔力はあまり感じられないけど、すごく強い。

(凄い、魔力の差が物凄くあるのに、秀哉君を圧倒している!?)

「負けれない・・・私たちもはじめよう」

そして、私は私の戦うべき相手と向き合った。

無月side

「お前弱いな・・・(今の俺くらいまで魔力落としているんだけどな)」

「チツツツ!!!」

(なんなんだよこいつ!魔力は明らかに少ないのになんだよこの強さはよ!!!)」

「向こうも終わったみたいだし、そろそろいいかな・・・」

「この俺が主人公!俺が最強なんだよ!!俺は負けないんだよ!!!」

「そうか・・・なら終わらせるぞ」

「ツ!!!」

秀哉side

(見えなかった)

俺様は強い、この強さでなのはやフェイト、はやてと叫びたかわいい子たちを

メロメロにして俺様の虜にするつもりだった。

(それなのになんなんだよ！いつ、強い、強すぎる！！)

「この俺が主人公！俺が最強なんだよ！！」

「そうか・・・なら終わらせるぞ」

そうあいつが言い放ったとき、俺の目の前からあいつの姿は無かった。

「ッ！！！」

そして、目の前が真っ暗になった・・・。

フェイトside

「・・・凄い」

(私のソニックフォームの最高速度を軽く越してる速度で、相手の後ろに回り込み、

的確に相手の意識を剥ぎ取っている！？)

「どうやら勝てたみたいだね」

「ふえ！あ、はい／／／」

いつの間にかフェイトの隣にボンゴレが居た。

(驚いて変な声出しちゃったよ～～／／／)

「まあいいよ、それじゃ俺は帰るから。体に気をつけるよ」

「え・・・はい、ありがとう」

そう言うと彼は少し微笑んで？消えた。

(一体なものなんだろう？どうして助けてくれたのかな・・・？)

無月side

家に帰宅後・・・

「今日は大変だったなアルフィン」

「何言ってるんですか無月。私今回の戦闘でなにもしていませんよ」

アルフィンは少し拗ねてる。

「別に今日の相手は弱かったからね」

「そうですね、魔力だけ有っても効率良く使えないのであれば宝の持ち腐れですね。秀哉という人にピッタリです」

「・・・なあアルフィン」

「なんですか？」

「お前怒ってるだろ」

「・・・い、いえ」

(・・・今の空白の時間はなんなんだよ!?)

少し怒っているアルフィンでした。

「あ、そうだ!」

「どうしましたか無月？」

「おーい可愛くて、優しくて、美しくて、綺麗な神様出てきてください」

「?出てくるわけな」呼んだー?」・・・ありましたね」

「実はさ少しだけ能力を追加して欲しいんだけどいいかな?」

「いいよー。この可愛くて、優しくて、美しくて、綺麗な神様に
お願いしてみなさい（エッヘンツ）」

「……………じゃあお願いなだけどさ……………」
そして俺のチート能力が増えた。

「てか、意外と簡単に能力追加してくれたな」
「良かったですね無月」

「まあこれで俺が負けることなんてあまりないだろ」
「……………（まず、攻撃くらうのですか？）」

~~~~~結果~~~~~

無月VS秀哉……………勝者：無月  
なのはVSフェイト……………勝者：フェイト

「そおいえば、アニメや漫画の能力フル活用できる時点で、別に頼  
まなくても

能力発動出来たんじゃね？」

「……………無月さん……………（今頃ですかあ……………（疲））」

無月VS秀哉(ボンゴレVS変態)(後書き)

無月「弱かったなーあの変態」

作者「まあ能力無しの変態で、魔力バカを目指したからね」

無月「ふーん・・・何か酷いな」

作者「黙れ、このフラグメイカーめっ!!!」

無月「・・・ルーン文字ハカノッ!!!」

作者「あぢいいいいいー!?!?!」

ルーン文字ハカノッは松明!!炎を示します。

なのはと無月 はじめの出会い(前書き)

作者「なあ無月」

無月「なんだ」

作者「なんでさ、せつかくのユニゾンデバイスなのにアルフィン  
人の状態にしないんだ？」

無月「分からないのか？どうせお前が俺とくっつけよつと  
するから  
だろ」

作者「・・・(やべえ、ばれてる(汗))」

## なのはと無月 はじめの出会い

無月 side

「温泉？」

教室でいきなり話かけられたと思ったら

高町に「温泉に行こうと誘われた」。

「いや、俺はいい。それに俺はその日予定がある」

「え、そうなの・・・ごめんね忙しいのに」

「・・・」

俺は未だに高町のことを理解できなかった。

いや、理解したくなかった、しなかったの方が正しいだろう。

(それに、温泉ってことはフェイト達と遭遇するわけ・・・か)

キーンコーンカーンコーン

「本当は温泉に行った先でも会うのだがな・・・」

俺の眩きは誰の耳にも届かなかった。

なのは side

~~~~今は御弁当タイム~~~~

「なのは！どうしてあんな奴を温泉に誘ったりなんてしたのよ!？」

「アリサちゃん落ち着いて」

「落ち着いてなんかいられないわよ！私はいつが嫌いなもの！」

「私は嫌いじゃないんだけどな……」

「なのは無月君のどこがいいの？」

「……うん、ちよっとね。うち、私がまだちっちゃい頃にね、お父さんが仕事で

大怪我しちゃってしばらくベットから動けななかったことがあるの。

喫茶店も始めたばかりで今ほど人気がなかったから、お母さんとお兄ちゃんは

いつもずっと忙しくてお姉ちゃんはずっとお父さんの看病で、だから私割りと最近

まで家で一人にいること多かったの。そんな時に無月君と出会ったの」

「ん？ちよっと待って。あいつは最近になって転校してきたのよ。

なんでそんな奴と出会ったの？」

「うん、それはね……私がある頃、家に居ても一人だったから公園で遊んでいたの、

その時にね足をくじいて動けなくて、辺りも暗くなって、一人で泣いていたの。

そんな時に無月君と出会ったの」

「初めは怖かったけど、心配してくれて、優しくして、それだけで安心できて、

私はいつの間にか泣き止んで、笑っていたの」

「……」

「そして、泣いていた理由を聞かれて、答えたの」

「それで、あいつはなんて言ったの？」

「「一人で抱えこまなくていい。一人で悩まなくていい。人は独りでは

生きてはいけないんだから。お父さんの怪我が治ったらいっぱい甘えなっ！」って

私はその言葉を聞いてまた泣いちゃったんだけどね。私が泣き止むまで傍に居てくれて

その後家まで送ってもらったの」

「ふーん。昔はあいつそんな奴だったんだ・・・今じゃ考えられないわね」

「でも、元はいい人なんだよ！きっとその後何かあったんだよ・・・」

「そっか・・・」

だから、私はあの約束を受け入れて、「お話」をさせてもらうんだから!!!

無月side

「くしゅん！」

「無月かぜでもひいたのですか？」

「いや、そんなわけないのだが・・・」

（なんて言うか嫌な予感がしたというか、寒気がしたというか・・・）

なんだかねで意思疎通？ができている二人であった。

「そっか・・・もうすぐで温泉イベントがあるのか・・・」

「いきたいのですかマスター？」

「マスターは止せて・・・いや、その温泉に行った先でテストロツサと高町

がエンカウトすんだが、多分あの変態野郎も出てくると思うし、もう少しV.Gの扱い方を正確にしておこうかな」

「ふふっ・・・まあマスターならなんとかかりますよ。っということは

マスターも温泉に行くのですか？」

「・・・アルフィン・・・そこまで名前で呼ぶの嫌だったのか・・・。温泉にいくと言っても、あいつらと遭遇するようなへまはしない。それに変態と戦えば、今の高町やテストアロッサでは勝つのは難しい」

「だからマスターが戦う・・・と。」

「・・・（もう、突っ込まん）」

「いいのではないですか？」

「え？」

「それがマスターのやりたいことならいいのではないのでしょうか」

「・・・ありがとなアルフィン」

「いいえ」

（それにしても、あの変態と戦ったとき、グローブのVerをXではなくVにしておけば奥の手に出来たんだがな・・・少し失敗したな）

「まあいい。戦いの時まで俺は武器の使用チェック等をする」

「かしこまりましたボス」

「・・・もう好きに呼んでくれ（涙）」

「では、ダーリン「それは無理だ」ええー・・・」

「名前がマスターにしてくれ・・・」

「ではご主人様で」

「話を聞けーーーー！！！」

無月の怒り（前書き）

作者「……………」

無月「どうした？今日はやけに静かだな」

作者「いや、次のバトルでどんな装備を使わせるか迷っていてな」

無月「！お前がそんなまともなことを考えていたとは！！」

作者「……………バカにしてる？」

無月の怒り

無月side

「まあこんなもんでいいか」

俺が今装備しているのは

・嵐のボンゴリング+SYSTEMAC・AIの開匣に必要なリングx4・大空のリングVer.X
・雨のネックレスVer.X・雲のブレスレットVer.X・霧のイヤリングVer.X
・シモンリング(大地・氷河・森・山・砂漠)・ボンゴレボックス・時雨金時。

(雨のネックレスと時雨金時は最終手段だ。まあ今回は使わないだろうが)

俺はジャミングコートを羽織る。

「よし・・・行くぞアルフィン！」

「はい。無月」

秀哉side

(うっひっひっひっひっひっひっ)

今日はなのは達が温泉に行く日だな

俺の認識障害の結界と視力強化を使えば・・・

ひゃうふ~~~~~のぞける~~~~~)

「うぶうぶうぶ ぶっぶっぶ~~~~~」

「ママー変な人が居るよ」

「こら、見てはいけません！」

（はあ〜〜愛しの人達の・・・ふふふ・・・）

変態は、どこに行っても、変態だった。

なのは・フイトside

（何か今ものすごい〜〜〜く悪寒が走ったんだけど・・・）

二人の脳裏に高町 秀哉の顔が浮かぶ

（結界張っておこう）

無月side

旅館の近くの林の一角

（そろそろか）

無月が目を覚ました頃には辺は暗くなり、
ロストロギアの反応と魔力の反応があった。

「アルフィン準備はいいか？」

「はい、いつでも」

「行くぞ！」

そして、無月の手袋の形が変わった・・・

フェイトside

「うっ・・・」

「フェイト!?!」

最初は誰も居なくて順調にことを運んでいたのに、

また、この前と同じ嫌な目線のこと、白いアジャケットの女の子、その子の使い魔らしいフェレットが現れ、ジュエルシードの封印を邪魔されてしまった。

「なあフェイトちゃん」

嫌な目線の男の子が話かけてきた

「君が僕の物になれば、ジュエルシードをあげるよ」

「!?!」

何・・・言っているの、あの人は・・・目線が・・・怖い!!

「フェイト!そんな奴の言葉なんか聞くな!!」

「黙れよ犬風情が」

男の子がそう言い放つとアルフの周りに魔法弾が・・・

「消えな」

「アルフ!!」

アルフが危ない!!そんなとき・・・

「さっきから黙って聞いていれば・・・お前ごとき雑魚が

調子に乗ってんじゃねえぞ・・・
「え?」

その瞬間。嫌な目線を送っていた男の子が地面に叩きつけられていた。

「がはっ!!」

無月side

(・・・この変態は・・・本当は斬りたいが、斬撃は闇の書のとくに使うからな・・・今回は大地の力で地べたに這い蹲らせてやるよ)

「フェイト・アルフ大丈夫か?」

「!あんたはボンゴレ!? 助けに来てくれたのかい!」

「ああ本当はもう少し早く来たかったんだが・・・ちよつとな」

寝ぼけて遠回りしてしまったとは言えまい。

「テムエ・・・ボンゴレ・・・俺様の邪魔を・・・」

「フェイト」

「は、はい!!」

「あんな奴の言うことをまにつけるな」

「え?」

「まあいい・・・お前は向こうの白い奴女の子と戦ってこい」

「う、うん。行ってくる」

「ぶっ・・・頑張ってこい」

(ミスったー!!。フェイトって呼んじまった・・・。まあいいか、

あいつも別に気にしてないだろ。それはともかく……)

「さて……ここから先は一方通行だ。

俺を倒してみな」

……俺ってアクセラレータになれるんじゃない？

フエイトside

(どうしてあの黒い服を着た男の子は私たちを守ってくれるのかな?)

「ねえ、アルフ？」

「さっきの黒服の男の子のことかい？」

「うん」

「あたしは信じるのはまだ早いと思う……けど」

「けど？」

「あのさっきの変態と今のプレシアよりはマシだと思っよ」

「うん……そう……だね」

お母さん……

「フエイト……私たちも戦っよ！」

「うん！」

なのはside

(やっぱり……私を感じていたあの嫌な視線は当たっていたんだ。

私が……もし、襲われたら……あの黒服の男の子は

助けて……くれるのかな)

「何考えてるんだろ・・・私」

「なのは、くるよ!」

「うん、わかってる。私達も戦うよユーノ君!」

強くなる!そして・・・

「フェイトちゃんや無月君とお友達になるんだから!!!」

無月の怒り（後書き）

無月「なあ・・・」

作者「ん？なんだいワトソン君」

無月「（あえてスルー）これさ、明らかに

フェイトのフラグ立てる気だよな・・・お前」

作者「ナンノコトカナ？」

無月「・・・ポイズンクッキング どうぞ、召し上がれ」

作者「え・・・ちよつ、おま・・・ガハッ」

バタッ！

作者は星々の仲間入りを果たしたのであった。

戦闘開始！〜能力テスト〜

無月side

「さあーで、最初から上げていくけどいいよな？」

まあ断られても上げるがな」

「はあはあはあ……」

無月は戦闘開始とともに大空のVGと大地のシモンリングを発動し、圧倒的な機動力で

秀哉を翻弄し、大地の重力で相手の機動力を大幅に削りとっていた。

「はあはあ……テメエ……なんだその力は」

「お前程度に教える義理はねえぞ雑魚が……」

「テメエ……調子に乗ってんじやねえぞおおおー！！！！」

（遅いって弱い……そして脆い）

秀哉が突っ込んでくるが、大地の重力で地面に叩きつける。

「ガハッ！」

（はあ……そろそろかな）

「大空のVG・大地のシモンリング解除」

無月がそう呟くと、無月の手や太もも当たりを纏っていた防具と、額に灯っていた炎と秀哉を抑えていた重力が消えた。

（次はこれだな……）

「来い。瓜、開匣」

ボックスの穴に指輪から出ていた真つ赤な炎を注入した。

「ニヤウーン！」

「なっ!?!」

「カンビオ・フォルマ
形態変化」

「ニヤアアア!!!」

瓜と呼ばれた猫は「カンビオ・フォルマ」と聞くと、
無月の左腕の武器の一部となった。

それは、荒々しく吹きあれる疾風と謳われた……

「Gの弓矢」
ジーのアーチエリー

秀哉 side

おいおい、こいつはどういうことだ!?!

いきなり猫が現れたとおもいきやあいつの武器になりやがったぞ!?!

「おい……何をしやがった……」

「お前に教える義理はないと言ったる？」

そして……これで吹き飛べ……」

あいつは、弦を引つ張り、溜めると……

「赤竜巻の矢!!!」
トルネード・フレイムアロー

バカデカイ一撃が俺に向かって放たれた。

溜めが少し長かったため、俺はなんとかギリギリで回避に成功する

ことができた。

「ふっ。今の技は少しばかり溜めるのに時間がかかるんだね」

「そうだな。だったらどうした！

果てる！ガトリングアロー！！」

数発の矢が俺に向かって放たれたが、

「ふっ。防御！！」

このぐらいの威力なら、俺のデカイ魔力を守りに回せば防げる。
ニヤリ。つい、笑ってしまった。

「ああーわり、今のお前の顔見たらちとイラ付いたわ・・・

ねえ、変態・・・」

「ああ。な」

「噛み殺すよ・・・」

俺が言い終わる前に言葉を遮られ、
その瞬間あいつから、物凄い殺気が俺に向かって放たれた。

無月side

(やべー・・・ちと殺気出しすぎちまったか？

まあいいや。あの変態のおかげでこっちは能力のテストが出来る
んだからな)

「お前・・・死ぬなよ」

「・・・は？」

俺はさつきとは色の違うボックスを出した。
そして違う色の炎をまた注入した。

「おいでロール、開匣」

ボックスから出てきたのはハリネズミだった。

「クピ」

「ロール、カンビオ・フォルマ」

「クピイーーーー!!」

「追加だ、シモンリング氷河・森!!」

そして俺は、鋭い葉と氷の葉を纏った。

「さあ始めようか。ワンサイドゲーム（一方的な虐殺）を・・・
（まあ殺しはしないけどな）」

秀哉 side

なんなんだこいつ、最初はグローブ、次は弓、そして次は・・・

「なんだそれは・・・トンファアと防具と・・・お前が纏っているのはなんだ？」

「はあああー・・・お前さ・・・3度目だぜ」

お前に教える義理は無い」

そこからは凄かった。あいつは動いてもいないのに

俺の体は「何か」によって体中を切り裂かれる。

「ぐわああ!!!... ぜえぜえぜえ... なんなんだよこいつ!...」

(攻撃が... 見えねえ...)

「ふむ。遠距離は大丈夫だな。てか、マジ切れ味スゲー。... 次はこれだ」

あいつはそう言い、トンファーを構える。
その瞬間...

「消えた!?!」

「遅いよ君。... 遅すぎる」

あいつは俺の懐に潜り込んでいた。
そして物凄い速さで俺に攻撃を打ち込む。

「ガハツツ!?!」

(こいつには... まだ... 勝てねえ)

俺の... ハーレ... ム)

そして、意識が途切れた...

無月side

(チツ! もう気絶したのかよ。かなり手加減したんだけどな...。まあある程度データもとれたし、次はヴァリアーリングを試すか...)

「ん、向こうも終わったみたいだな」

「そのようです。マスター」

ふと、なのはとフェイトの方に目をやると
フェイトとアルフが遠くに飛行していた。

「俺も変えるか。そお言えば、孫悟空みたいに瞬間移動できるのか
な？」

「試してみてもいいかがですか？」

「あ、いや第8の属性の炎を使ってみる」

「第8の属性の炎？」

アルフィンに尋ねられたが、見せた方が早いと判断に、
手を前に出し、

「開け」

そう呟くと、空間に穴が空いた。いや、炎によって作られた。

「行くか」

この場から立ち去ろうとしたとき

「あ、あのー!!」

声をかけられた……………はあ

番外編（前書き）

明けましておめでとうございます。

……*Happy・New・

Year*……

番外編

全員「新年明けましておめでとーございます」

アリサ「いやーもう2012かー」

すずか「なんか慌ただしい年だったねー」

無月「そうか？俺はのんびりやっていたけどな」

なのは「私も私もー」

作者「いいよなー小学生は・・・」

アリサ& amp ;無月「あぁん!!（怒）」

作者「し、しょうがないだろ！こっちは受験だし、仕事あるし

課題だつて沢山あるんだからよ!!」

無月「それは冬休みに入って小説読んでいた時間8割はあるよ

作者さんやい」

作者「・・・そ、それは・・・ねえ」

アリサ「自分がやらなかったからって小学生に当たらないでくれな
いかしら!」

作者「（グサグサッ）」

作者のライフは312削られた。

無月「てか、8割小説読んでるって・・・根暗か？」

作者「（グサグサグサッ）」

作者のライフは864削られた。

作者「いいもん、いいもん・・・グスッ」

アリサ「・・・そんなだから彼女ができないのよ」

ドッカーーン！！

作者にクリティカルヒット。作者のライフは3648削られた。

作者は死亡した。

アルフ「なにしてるんだい？」

作者「アールフー！！！」

ぎゅっ

なのは・アリス・すずか「「「あああ！！！！！」」」

アルフ「ちよっと！何するんだい／＼／」

作者「うっうう。アリサと無月がオラをいじめるんだべさ」

番外編（後書き）

今年もよろしくお願いします。

少しの会話（前書き）

無月「そういえばさ、俺って修行したら自分固有の技とか
習得出来るのか？」

作者「ああ。できるぞ」

無月「そう……か」

作者「……？」

少しの会話

なのはside

負けた。またあのフェイトちゃんに負けた。

名前は教えてもらったけど、私の名前は聞かずにどこかに行っちゃった。

「……………」

「なのは……大丈夫？」

「ユーノ君……うん……私は平気」

穏当はかなり落ち込んでいる。フェイトちゃんには負けて、ジユエルシードは取られ、名前は聞いてもらえなかった。

(私どうすればいいんだろう……)

ドゴオオン!!

そんなとき、別の方から大きな音が聞こえた。

どうやら、男の子同士の戦いも終わったみたい。

途中から現れた男の子が立っていた。

「なのは、あの子からフェイトについて何か聞いてみよう」

「え、う、うん。分かった」

私は急いで彼の元に向かった。

「あ、あの!!」

なんとか、彼がこの場から立ち去る前に話しかけることができた。

無月side

「あ、あの!!」

俺はこのとき嫌な予感がした。そのまま無視して転移してもよかったのだが、

その後が面倒になるかもしれないので話を聞くことにした。

(はぁ面倒だな・・・)

そう思いつつも、

「なんのようだ?」

なのはside

話かけたのはいいけど、聞きたいことが沢山あって私は戸惑ってしまった。

「え、えっと・・・あ、・・・えっと・・・」

「ねえ君」

「ゆ、ユ一ノ君!？」

「君のその力はなんだい?魔法ではないようだけど」

「ん?ああこれのことか」

そう言つて彼は両手の指輪を私たちに見せてきた。

「それはなんだい?」

「別に。お前には関係ないよ」

「あ、あ、あ・・・あの!!!!」

無月side

(ああーだりいー)。早く帰って次使う武器を確認したいんだけどなあ……)

そんなことを考えていると。

「あ、あ、あ……あの……!」

いきなり高町が大声で怒鳴った。

「え、えと、大声出してすみません!」

「別に気にしてない」

(謝るんだったら早く帰らせてくれ)

「わたし、私高町なのはって言います!」

あれ?自己紹介まだしてなかったっけ?

「あなたはボンゴレさんでいいんですか?」

「ああ俺はボンゴレだ」

まあ偽名だけだな。

「ボンゴレさんはなんでフェイトちゃんを助けているの?」

「それは簡単。あの変態から守るため」

そして俺は気絶している(笑)秀哉(変態)を指さした。

「そうなの・・・だったら、ふえい「フェイトのことが知りたければ自分であの子に聞きな。それが無理なら諦めな」貴方はフェイトちゃんの何を知っているの?」

「うーん。ぶつちゃけ、ほとんど全部知ってる」

「えっ・・・」

「でも、それは俺の言うべきことではない。君が心から何かを望み、行動すれば

自ずと答えは見つかる」

そろそろ潮時かな

「え、それってどういうク」じゃあな「あっ!ちょっと待って・・・」

そして俺はゲートをくぐった。

「・・・マスター」

「どうしたアルフィン」

「やはりマスターは優しいんですね」

「・・・俺がか?・・・」

「くすっ・・・」

なのはside

「行っちゃった・・・」

「それにしても彼・・・ボンゴレのあの力は一体何なんだ」

何か、ユーノ君がぶつぶつ呟いているけど、

私はそんなことより

ボンゴレ君を・・・フェイトちゃんをもっと知りたいと思った。

「それにしても彼は一体どうやって、どこから動物を召喚し、どうやってそれらを自分の武器に変換して装備しているのだ？」

今のユーノ君

正直……怖い。

秀哉 side

「ん……はっ！俺はどうしていた」

俺は驚いて立とうとしたが

「ツツツ!!」

身体中が傷だらけで、座り込んでしまった。

「あのボンゴレとか言う奴のせいか……あのやるう……
今度あつた時こそ……殺す!!」

そしてその時こそフェイトとなのはをこの手に……ニヤッ

「つと、傷治さないとな……ウイルス」

「なんのようだ」

「おいおい、マスターに向かってその口調はないだろ」

「少なくともボンゴレみたいにデバイス無しであそこまで強くなれたら
考えやる」

「そっかぁーデバイス無しでかぁー……って！デバイス無し!？」

あいつ、今までデバイス使って居なかったのかよ!？」

「ああそうだが」

(デバイス無しでこの強さ・・・あいつやっぱり・・・転生者か)

まあ転生者がなんだろうが、俺のハーレムの邪魔をするなら潰すまでだ!!

少しの会話（後書き）

無月「なんだ、あの変態まだハーレム夢みていやがるのか」

作者「まあ俺が残念系で設定しているからな（、*）」

無月「……（こいつは酷いな）」

作者「何か言ったかい？」

無月「……別に」

すれ違い(前書き)

無月「……………」

作者「お前が悩んでいるなんて珍しいな」

無月「まあな……ちよつと……………」

作者「まあ俺にはあんましわからないが、とにかく頑張れよ」

無月「ふっ……………すまん」

すれ違い

無月side

「いい加減にしなさいよ！」

俺はその大声で夢から覚めた。

「この間からつわの空でボートして」

「ごめんねありさちゃん……」

「ごめんじゃない！あたし達と話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボートしてなさいよ！！いくよすすか」

教室から出ていくアリサ。

「あ、アリサちゃん……。あ、なのはちゃん」

「いいよすすかちゃん今のはなのはが悪かったから」

「そんなことないと思うけど、」

取り敢えずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話してくるね」

「ごめんね」

アリサを追いかけるすすか。

「怒らせちゃったな……。ごめんね。アリサちゃん」

「……高町はそれでいいのか？」

「え？」

「確かに、どんなに仲のいい親友同士でも、

隠し事ぐらいは1つや2つは誰にでもある」

「……」

「でもさ、俺は、それはそれで良いと思うよ」

「・・・？」

「高町達は親友同士なんだろう？大切な友達なんだろう？そんな仲が隠し事ぐらいで

ぐらいで壊れたりするわけないだろう？どうせバニングスのことだ、高町が自分の話を聞いていないことよりも、自分たちに相談してくれない事に怒っているんじゃないかな？例えばぐぐとかから始めて、自分の気持ちを伝えないよ。大事な友達なんだろう？もし、話しくいことなら、もう少し待ってほしいとか言って謝ってこいよ。お前らしくねえぞ」

「無月君・・・うん。分かった。ありがとう」

教室を出ていく高町

「ふう・・・俺って案外お人好しなのかもな・・・」

「そうだと思いますよ、マスター」

なれねえことはしない方がいいな・・・。

・・・よし、家に帰るか。

そして、身支度を整え始める。

（まだ昼過ぎか・・・公園で昼寝でもするか）

（あれ？いつの間にか暗く・・・って！

確かこの時期は街中でジュエルシードが暴走するイベントが！

くそっ・・・間に合えよ！・・・」

フエイトside

「止まれ・・・止まれ・・・」

「フエイト!!」

私がこのジュエルシードを止めないと・・・
母さんのために・・・母さんのために・・・

「フエイトよくなって!フエイトの体が!!」

「全く・・・お前はバカだな」

「・・・え?」

「あんたは!?!」

そう、また彼だったいつも私を助けてくれる人。
いつの間にか傍にいて、いつの間にか居なくなっている。
そんな・・・人・・・。

「俺も力を貸してやる」

彼はそういい、私の手に手を重ねて着た。

「「止まれ止まれ止まれ止まれ!!」」

そして、ジュエルシードの光が納まっていく・・・

「良かった・・・た・・・」

私はそこで気を失った。

無月side

あつぶねえーてか、ついたときにはジュエルシールドが暴走してたし。

「おつと」

多分疲れたんだろうな。

気を失ったフェイトを支え、頭を少し撫でてからぞくに言うお姫様抱っこをした。

「アルフ！早く俺をお前たちのアジトへ案内しろ」

「お前、何ってるんだい！」

「大丈夫だ、フェイトの怪我は俺が治す」

「そんなの信じれるわけないだろ！」

「俺はフェイトの敵ではない」

「……あんたの言葉、信じるからね」

アルフは俺とフェイトと共に転移魔法を使った。

そして俺とフェイト、アルフはフェイト達の部屋にやってきた。

「ねえ、あんたにはフェイトの怪我を治せるのかい？」

「まあ見てな」

俺はそう言い。両手を掲げ……

「サイフォジオ！」

「ちよつとアンタ！フェイトを殺すつもりかい！？」

まあ始めて見る人はみんなそんなことを言うだろうが……

「違うこれは治癒魔法だ。まあみとけ」

そして俺はフェイトに向けて両手を振り下ろし、その癒しの剣はフェイトの傷を治していった。

「す、すごい・・・」

「この魔法は怪我だけじゃなくて、日頃の疲れも少しばかり回復させる効果があるから、フェイトにはピッタリの治癒魔法だ」

「アンタそんな魔法が使えるのかい!？」

「まあね。けど、魔法は万能ではない。ちゃんと休ませないといずれは大きな事故に繋がるかもしれない」

「うっ・・・それは分かってる。分かってるけど・・・」

「お前たちにも人にはいけないことがあるんだろ？」

別に無理して話さなくてもいいよ」

「そうか・・・ありがとね」

「ふっ・・・別に気にするな。俺は勝手に出てきて、

勝手に手伝って、勝手に出ていくだけだからな」

「・・・それはどうかと思うけどね」

「まあ俺はもう帰るけど、二人ともあんまり無理するなよ」

「ああすまないね」

「気にすんな。じゃな」

俺は炎を使ってゲートを作り

家に帰った。

(・・・アルフってスタイルいいよな・・・)

「マスター？何かおっしやいましたか？」

「い、いえ・・・何も」

「でしたらいいです」

今、デバイスから負のオーラを感じたよ・・・。

すれ違い（後書き）

アルフ「フェイト……」

無月「朝には目が覚めると思う。だが、あんまし無理なことは言えないが、

フェイトだって女の子だ。まあその辺のことはアルフが一番理解していると思うからあえて口にはしないぞ」

アルフ「本当にすまないね」

無月「別に良いよ言っているだろ。俺は勝手にやっているだけだ」

アルフ「……あるがとう」

無月「……それを言うならあ「り」がとうじゃね？」

アルフ「……の……」

アルフが首を締めてくる。

無月「（背中に柔らかいのが当たってるよ……）TへT（く
う）」

Xの新技(前書き)

無月「よう」

作者「おう、ってお前久しぶりに見かけたな」

無月「まあな。ちょっとばっかし修行を置いてな」

作者「修行？ってことは技でも手に入れたのか」

無月「それは本編のお楽しみ」

Xの新技

フェイス side

陽が昇り、部屋が明るくなったところで私は目が覚めた。

「あれ？傷が無い・・・体が軽い」

私はトントンとジャンプしてみた。

体に異常が見当たらない。昨日は無茶なことをしたから体が悲鳴を上げていると思ったのに、逆に今までより体が軽くなっている感じがする。

(一体どうして?)

そう思っていると・・・

「フェイス!!」

アルフが私に飛びついてきた。

「フェイスー!!無事だったかい?」

「う、うん。それよりアルフ。私の体の傷がなくなっているうえに、今までの疲れが全く感じないんだけどどうして?」

「うーん・・・それはあたいにも分からないんだよねえ・・・」
「どづいづこと?」

私は昨日のジュエルシールドの暴走を止めた後からの話を聞いた。

「また彼・・・ボンゴレ君に助けられたんだ・・・」

「そうだよ、フェイト。あいつが居なかつたら危ない状態だったんだから」

「ごめんねアルフ。心配かけて」

「いや、私はいいよ。それより昨日の彼の治癒魔法はすごかったんだよおー」

「へえ・・・どんなのだったの？」

「なんか・・・剣？みたいなのが出てきて、それをフェイトに突き刺して・・・」

「・・・え」

「まああたいもそのときは驚いたけど、

あれで本当にフェイトが回復してるんだから本当に驚いたよ」

（彼にまた助けてもらったんだ・・・彼に恩返しができたらいいな・・・）

そんなことを胸に秘めたフェイトであった。

無月side

（暫くは修行に身を入れたいな）

そういうことで、無月はフェイト達と別れた後、

三日間の間学校をさび・・・ではなく休んでいた。

修行場所は林の中。結界を張ってグローブの戦い方のバリエーションの追加と、新技の実験をしていた。

（よし、新技は完成した。後は実践で使えるか・・・！！）

そのとき無月は感じた。ジュエルシードを・・・

ちょうど新技の実験台にはいいか

(それに、ヴァリアーリングも試しておきたいしな)

「なーんだ、もう封印は終わっているじゃねえか」

そう思ったが、なのはとフェイトの決闘に邪魔な奴がいた・・・

「あの変態・・・またフェイトの邪魔してやがるよ・・・

まあ3(なのは・ユーノ・変態)対2(フェイト・アルフ)では
差がねえ・・・行くぞ」

そこには赤いグローブを付け、腰に2丁の銃が装備されていた。

フェイトside

(くっ・・・母さんの鞭打ちが体に響いてる・・・
反応が遅れた!)

変態の砲撃がフェイトを包み込む。

「ナッツ」

ドガアアアーン!!!!!!!!!!

「フェイトー！！！！」

(アルフが叫んでる・・・あれ？痛くない・・・)

ズダンッズダンッ！！
そして、普通の銃からではありえない、
オレンジ色の光線が銃口から放たれた。

秀哉 side

「お前・・・相当のバグキャラだな」

「SSSランクの魔力量の変態には言われたくないな」

(コイツ・・・俺の砲弾を的確に撃ち落としてきやがる)

「・・・やっぱり遠距離は少し苦手だな」

あいつはそう言つと2丁銃をホルターに戻しやがった。

「やっぱり男は接近戦だよな」

「ッ！！」

またかよ、こいつ速過ぎるだろ！？

「お前には俺のグローブの新技をテストしてやる
くられ、【Xバティック】」

あいつの各々の指先から炎のエネルギーが放たれた。

「くっ！！」

一撃の威力は弱い、弾丸速度が速い。

「ふーん。Xバティックは使い続けると回避される

確率が上がるか。じゃあ次だ【Xクロー】」
「今度はなんだよ!!」

次のは、あいつのグローブが炎でコーティングされて
巨大な炎の爪になっていた。そして攻撃が見えなかった。

「ぐはっあああー!!!」

無月side

【Xクロー】は炎を消費し続けるが、攻撃速度が格段にあがる。
接近戦重視の肉体強化の効果も含んでいる。

(そろそろ終わらすか)

炎圧をあげて、変態の後ろへ回り込む

(【クローブレイズ】!!!)

「ぐはっあああー!!!」

そして変態は堕ちた・・・

「そろそろフェイト達も終わって・・・ん？」
そこにはフェイトとなのはを止めている少年がいた。

「時空管理局執務管クロノ・ハラオウンだ。
詳しい事情を聞かせてもらおうか(´・`・´) キリッ」

Xの新技（後書き）

無月「……………」

作者「そうセフェイトが心配なんだろう？」

無月「まあな……俺は次回クロノを潰す！」

作者「まあそう言うことは分かりきっていたけどな……

てか、新技の説明とかしなくていいのか？」

無月「それはご都合主義ということだ」

作者「はいはい……………」

時空管理局？何それ美味しいの？（前書き）

無月「前回の終わり頃に変な奴が現れたよな」

作者「ああ時空管理局のクロノとかいう奴のことか」

無月「ああ。あいつさ、何かしそうなんだよね」

作者「何かって？」

無月「さあ・・・何かって何かだよ！」

作者「・・・それって無茶苦茶だな（汗）」

時空管理局？何それ美味しいの？

無月side

(何者だあいつ・・・)

「時空管理局執務菅クロノ・ハラオウンだ。
詳しい事情を聞かせてもらおうか) ・・・(キリッ」

フェイトがジュエルシードを取ろうと手を伸ばすが、
クロノの砲弾によって撃ち落とされてしまう。

「きゃっ！」

「フェイト!!」

(おいアルフ聞こえるか)

(その声はボンゴレ!?)

(話は後だジュエルシードと転移魔法を頼む)

(任せて!・・・ってあんたはどうするんだい?)

(ん？ちよつとね・・・フェイトを攻撃したあの坊やにおきゆうを・・・
ね)

「大空のVG・大地のシモンリングよ・・・
今、一つになりて、我に力を貸せ」

そして二つのリングが一つになった。

「クロノとか言ったよな・・・お前」

「ここでの戦闘はカードガア!」くはあ・・・」

「わりいな、どうやら手加減は出来そうにない・・・」

俺はクロノを重力で大地に押さえつけたまま

「・・・オペレーションX」イクス

「了解しました。ボス」

「イクスバーナー発射シークエンスを開始します」

「ライトバーナー柔の炎15万FVで固定」

「レフトバーナー柔から業に変換しつつ

炎エネルギーをグローブクリスタル内に充填」

「ターゲットロックライトバーナー炎圧再上昇」

「18万・19万・20万FV」ファイアンマボルテジ

「レフトバーナー炎圧上昇18万・19万・20万FV」

「ゲージシンメトリ発射スタンバイ」イクスバーナーピイーーーー

「X BURNER!!」

ゴアアアアーーーー！！！！

クロノは業の炎に包まれた。

「ぐああああーーーー」

「安心しろ非殺傷に設定してあるからな」

「行くぞアルフ！」

「おう！」

なのはside

私は凄いのをみた。

私とフェイトちゃんの攻撃を止めた男の子を

簡単に倒してしまう。一撃。

私のスターライトブレイカーと同等かそれ以上の攻撃。

私はその技を見て、彼に憧れてしまった。

「私にもんなんな技が・・・」

使えたらいいのに。そう言いたかった。

でも、今の私にはあの技を超える術はないということ
本能的に感じ取ってしまった。

「あっ・・・」

そんな事を考えているうちに、
彼とフェイトちゃんたちは転移魔法でどこかえ
行ってしまった。

アルフside

「フェイト・・・」

フェイトはプレシアの酷い仕打ちに加え、
クロノとかいう奴による攻撃。

「アルフ。フェイトを早く横にするんだ」

「ああ分かった」

「サイフォジオ！」

またこのあいだと同じ大きな剣が出てきたフェイトの
傷が塞がっていく。

「・・・一応はこれで大丈夫だろう」

「すまないね、あたいが不甲斐ないばかりにあんたに

迷惑を「ストップ」ないかい？」

「何度も言わせるな。俺は好きにやっているだけだ
アルフが気にすることでは無い」

「じゃあなんでアンタはこんな危険なことに
首を突っ込んでいるんだい？」

「・・・さあな。ただ」

「ただ？」

彼は息を深く吸い込む。

「俺は人に利用されるのが嫌いだし、
人が人に利用される事も嫌いだからだ」

「！！お前、フェイトの何を知っている！？」

「プレシア・テストロツサの命令により、
危険を犯してまでジュエルシードを集める少女。

ただ・・・昔の母親に戻って欲しいがために・・・」

「アンタ・・・何者だい？そしてなにが目的だい」

彼の発言にアタイの警戒心が増す。

「何者かは、今のところ言えないな。目的・・・か」
「・・・」

「強いて言えば・・・フェイトに幸せになっ
てほしい事・・・かな」

「フェイトの幸せを望む？」

「まあ。今のところこんなところは・・・な」

「そうかい」

私は彼の言ったことに嘘は無いと思う。

でも、最初の頃からこいつはフードを被っているけどなんでなんだ？

聞いてみるか。

「じゃあ、なんでアンタは最初の頃から顔を隠しているんだい？」

「ん、ああそれは時期に分かる時がくる」

「いや、隠してる理由を聞きたいんだけど・・・」

「だってさ、正体不明の見方ってかつこよくね（笑）」

「・・・聞いたアタイがバカだったよ」

取り敢えず、プレシアよりは信頼できると思った。

そして、アタイは彼に対する警戒心を解いた。

「しょうがないねえ。取り敢えずはアタイはアンタを
信じてみるよ」

「ふっ。そうしてくれると俺もありがたい」

それにフェイトは彼のこと嫌いではないみたいだし。

あの秀哉とかいう変態よりは何百倍、何千倍もマシだ。

時空管理局？何それ美味しいの？（後書き）

無月「（一、一、一）フゥー・・・」

作者「良かったな。アルフの警戒心を解けて」

無月「ああ。それにクロノにもお級を据えることが出来たしな」

作者「・・・本当はそこかよ」

フェイトの気持ち(前書き)

無月「ん〜」

作者「なんでそんなにハイテンションなんだ？」

無月「別に〜クロノとかいう奴をボコれて嬉しいなんて

思っ
てないよー」

作者「……(こいつまだそんなことを)

フェイトの気持ち

「ん……」

私は目が覚めたときにはいつものベットだった。

「私は……あっ」

昨日のジュエルシード封印のときに
時空管理局とかいうところのからきた
クロノとかいう人に攻撃されて……

「……あれ？どこも痛くない……」

どうしてだろう。どこも痛くない。

「目が覚めたのかい？」

いつの間にかアルフだ傍にいた。

「私が昨日気を失ってから何があったの？」

「えっと……フェイトを攻撃したクロノとかいう奴が、

ボンゴレの滅茶苦茶な攻撃によって倒されて、その後

転移魔法でここに戻ってきて、そのままボンゴレが治癒魔法で

フェイトの怪我を治してくれたんだよ」

「そっか……」

またあの人が私を助けてくれたんだ。

なんでだろう……

(なんか胸の当たりがあつたかい感じがする・・・)

それはフェイトにとって初めての感覚だった。

「どうしたんだい？フェイト」

「ひゃっ！え、い、いや、なんでもないよ！／＼／」

「フェイト。顔赤いよ」

「にやんでもないよ！」

・・・噛んじゃったよ・・・／＼／

無月side

昨日の戦いでおそらくなのはとユーノと変態は
時空管理局側についたはずだ。

それに、そろそろフェイトが海にある六つのジュエルシードを
封印するために巨大な魔法を打ち込むはずだ。

「ってことは・・・今日がプレシアによる攻撃があるのか」

「無月どうしますか？」

「どうって・・・簡単なことだろアルフィン」

「俺がフェイトの変わりになって雷撃を海に打ち込んで、

その後プレシアの目を覚まさせるまでだ！」

「さすがですね。マスター」

「何がさすがかは知らんが、俺のことはマスターで決まったのか？」

「はい。これが一番しっくりきますので」

「・・・・・・・・」

まあダーリンやご主人様よりは遥かにマシだがな。

「よし、行くか」

「Yes・My road」

「・・・普通に返せよ」

(一応プレシアの雷撃に備えてのシールドを考えておくか)

俺は全てのVGと全てのシモンリングを装備した。

フエイトside

私は海にあるジュエルシールドを封印するために
海に剛雷を落として、ジュエルシールドを強制発動させて
位置を特定しようとしていた

「アルタス・クルタス・エイヒビス

煌めきたる電神よ、今導きの元降り来れ

バルエル・ザルエル・プラウゼル

撃つは雷、響くは剛雷

アルタス・クルタス・エイh「お前にはまだ早い」えっ」

私は腕を掴まれていた。振り向くとそこに居たのは
彼だった。暫くの間、私の前に現れ無かった・・・

「今のお前の魔力量じゃジュエルシールドの強制発動後の
封印までは辿り付けない」

「ボン・・・ゴ・・・レ」

「だからお前は後ろに下がって見ときな」

彼はそう言い、私の頭を軽く撫でてくれた。

「ふえっ！……………／／／」

「さあ、行け」

「あ、ありがとう……………／／／」

いつの間にか私を助けてくれた。いつの間にか私の傷を治してくれた。

彼の素顔は分からない。それでも私は、彼のことを……………

「そんじゃあいくか！」

彼はそう言い、呪文を唱え始めた……………

無月side

俺は少しだけ何の技をするか、迷っていたがすぐに決まった。

「そんじゃあいくか！」

気持ちを落ち着かせる。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

ト・シユンボライオン・ディアコネートー・モイ

(契約に従い我に従え)

バシレク・ウーラニオーノーン

(高殿の王)

エピゲーター・アイタルース・ケラウネ・ホス

(来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ)

ティターナス・フティレイン

(雷霆)

ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラプサトー

「ああ、いいよ」

と言って、フェイトの近くに行き・

ナデナデ

「……………あ、ありがとう／＼／＼」

真っ赤な顔をしたフェイトにそう言われた。

「じゃあフェイトも頑張れよ」

「マスターの女落とし」

アルフィンが何か言ったが、無視し、変態のところに向かった。手を離れたとき、フェイトの顔が少し残念そうに見えたが、気のせいだろう。

(さて、ここは海だから本当は雨のV.Gで戦いんだが、あれは闇の書事件の際に使用する予定だから使えない。となると、やはり大空と雲のV.Gと大地のシモンリングがメインだな)

さて、変態をどうやって甚振ろうかな……

「マスター怖いですよ」

アルフィンに突っ込まれたが、あえて返さないようにしよう。

フェイトの気持ち（後書き）

無月「……………」

作者「どうした無月。考え事か？」

無月「んー。なんかフェイトの顔赤かったけど

風邪でも引いたのかなって思ってたさ」

作者「……………（何言ってるんだコイツ）」

無月散る(前書き)

無月「しっかしさー変態の相手するの面倒なんだけど」

作者「仕方ないだろ。時々は出さないと読者が
忘れてしまつかもしれないだろ？」

無月「……え？」

無月散る

無月side

俺の目の前には変態が居る。

「よう、また会ったな。ゴミムシ風情が」

「久々だな、変態。牢屋にでも入っていたのか？」

「ふっ……。テメエを墮とすために、アースラの訓練所で修行を積んでいたんだよ」

「なのはやフェイト達を落とすの間違いじゃねえのか？」

「……………」

(凶星かよ…………)

「まあいいさ、お前はここで散る」

「へっ……。試して見るよおおおー！」

そして、変態とボンゴレの戦いが始まった。

「シュート」

「くっ！」

変態が13個の魔力弾を精製して、それぞれをコントロールしながら俺に向かって撃ってきやがる。

「甘い！」

「お前がな！！」

「っ！！」

俺が回避したその先には、収束魔砲を溜め終わった変態がそこにいた。

「これで、消えな。エレクトバスターー!!」

「うあああー……」

(俺が……敗北……?)

秀哉 side

ついに……ついに……ついにあの忌まわしいボンゴレを
墮とすことが出来たぞ!

「くくくく……はははは……はっはっはっはー!!!!」

これで……これで……

「なのはやフェイト達のようなボンツキュツボンの
美少女達が俺の物になるぜー!!!!

ヒヤッホー……イ!!!!」

これで10年後にはあんなことやこんなことを……

「ん、終わったのか?」

「え?」

俺がとあることを妄想していたが、

目の前には俺が墮としたはずの奴がいた。

「お、おお前は俺が墮としたはず!

な……なんでここにいる!?!」

「ぶっ……いいぜ。種明かしといこうか」

ボンゴレはそおいい、耳にあるイヤリングを見せた。

無月side

「お前が倒したと思っっていたものは、幻覚。」

つまり、まやかしたよ」

「そんなバカな！確かに当たった感覚はあるんだぞ!？」

「はぁぁー・・・原に俺はここにいるし、それだけ

俺の幻覚が強いつてことだろ？」

「そんな・・・そんなことが・・・」

そう。俺はここに来る途中から霧のVGと使い、

俺の分身、正確に言えば幻影を作ってたんだ。

さらにはそれを砂漠のシモンリングの力でコーティング。

普通では誰も気づくことが出来ない、強力な分身を作り上げていた。

そしてそれを変態と戦わせていた。

「さて・・・お遊びはここまでだ。こっちだって予定が詰まってるんでな」

俺は大空のVG・大地・氷河のシモンリングに

炎を灯した。

「さっさと終わらせる」

俺は変態の後ろに回り込み、後頭部に強い衝撃を与え、

変態が怯んでいる間に、大地の重力で、海の水面のギリギリまで

落とす。その後、氷河の力で「ダイヤモンドキャッスル」

無敵の防御壁を

↑↑↑ロ・ティフェーザ・インヴァンチャービレ

雷は私に当たらなかった。
それは……

「ボンゴレ君」

「高町！ フェイトみたいに俺の後ろに來い！」
「ふえ！ うん。 分かった」

彼の腕のいろんなところに亀裂が入り、
地が出ている。

「ボンゴレ君！！」

そして、雷が止まった。

「くっ！ やはりこの技は体に負担があるな」
「ボンゴレ君。 その腕……」
「なに心配しているんだよフェイト。 今までのお前の傷の方が
深刻だっつーの」

彼はそおいい、私の頭を撫でてくれた。

「まあいい、高町、いずれフェイトとは話をさせてやるから
今日のところは簡便な。 フェイトもな」

「は、はい。 分かりました」

「うん・・ノノ」

「アルフジュエルシードを3つ取ってきてくれ」

「ああ、分かった」

「開け」

そして私たち3人は帰った。

無月side

「くっ」

はやり、あの巨大な盾を2つも操るのにかなり体に負担がかかるな。

「ボンゴレ君。その腕・・・早く手当しないと!!」

「ん、いや、いいよ。自分の治癒魔法があるし」

「そうだよフェイト。こいつの治癒魔法をみときなっ」

俺は両手を掲げ・・・

「サイフォジオ。シン・サイフォジオ」

俺は自分とフェイト達も回復させた。

「えっ何で私たちまで回復させたの？」

「何でって・・・母さんのところにジュエルシールドを

届けに行くんだろ？」

「!!!う・・・うん」

「じゃあな!!」

俺はそおいい他の場所に転移した。

ナレーターside

そして次の日

無月 side

昨日のあの後、フェイトとアルフは離れ離れになって、アルフに至っては、アリサの家に世話になっている頃だな。そして明日の朝・・・フェイトとなのはの勝負が始まる。

「あ、そういえば・・・変態のダイヤモンドキャツスル
解除していないよな・・・」

「マスター・・・貴方は鬼ですか」

「・・・まあいつか！（笑）」

「・・・（このマスターは鬼ですね）」

「助けるやゴラアアアーーーー」と言う叫び声が聞こえたような気がした

無月とアルフィンであった。

無月散る（後書き）

無月「ふー……。楽しかったなー。」

作者「何がだ？」

無月「いやー。俺の幻覚であいつが高笑いしているところとか、その後とかさ」

作者「……お前性格良いな」

フェイトVSなのは、海の上の決闘（前書き）

無月「あのさー」

作者「んあ？」

無月「タイトルだけ、無駄にかっこよくな？」

作者「だってさ……かっこいいじゃん」

無月「……だと思ったよ」

フェイトVSなのはは海の上の決闘

なのはside

「ただ、捨てれば良いってわけじゃないよね。逃げれば良いってわけじゃ

もつと無い。きっかけはきつとジュエルシード。だからかけよう、お互いが持つてる全部のジュエルシードを！」

ジュエルシードが私の周りに浮かぶ・・・

「それからだよ全部・・・それから・・・」

私たちの全ては、まだ始まってもない。

「だから本当の自分を始めるために」

だから始めよう。最初で最後の本気の勝負！！

無月side

「おーやってるねえー」

「き、君は！」

「ボンゴレ！」

フェイトとなのはは海の上の上空で戦っていた。

「おーっす。アルフとフェレット状態で温泉に入って女性の体を眺めていた

ユーノさん」

「ん……」

目を開けると……

「大丈夫みたいだなフェイト」

「ボンゴレ……」

彼がいた。しかもこの状態は……

「……お姫様抱っこ／＼／＼」

「！来る！！なのは、フェイトを頼む！」

「え！うん」

彼は何かを急いでいた。

「そろそろ来るか……リマ・チャージル・セシルドン！」

彼はあの時と同じように巨大な盾を二つ出した。

「ボンゴレ君！その技を使っちゃダメ！！

あなたの体が！！」

そのとき、母さんの雷が降り注いできた。

「ハアアア……！！」

「アースラのエイミー！居場所の解析を！！」

エイミー？誰だろう？

あ、母さんの雷が止んでいく・・・

「取り敢えずみんな。アースラに戻ってくれ」

「……えっ?」「……」

「これから、大事な戦いが待っている。エイミィ転送を」

そして私・なのは・アルフ・ユーノの4人は
アースラへと転送された。

無月side

「さて、俺たちも行くか」

「そうですねマスター」

そして俺たちも炎のゲートをくぐった。

リンデイside

あのボンゴレとかいう子、アースラに炎の出すや、
いきなり炎の中から出てきた。

「ここは仮りにも管理局。どうしてそんなところに転移が出来るの
かしら?」

一体なものなのかしらこの子は・・・

「?別に。この程度誰にも出来るだろ」

普通はできませんよ。

「それに、今は俺のことより、目の前のことに集中しな」

彼の言葉通りだ。そして私はモニターに目を向け……！！

「危ない！防いで！！」

プレシアの雷撃が局員達を襲う

無月side

「いけない、局員達の送還を！」

「りよ、了解です！」

「もうダメね時間が無いわ。たった9個のロストログアではアルハザードにたどり着けるかどうかは分からないけど……でももういいわ、終わりにする。この子を亡くしてからの暗鬱な時間をこの子の身代わりの人形を娘扱いするのを……」

フェイトの体が強ばる……

俺はフェイトの隣に立って、フェイトの手を握る……

「ボンゴ……レ」

「聞いていて……あなたのことよフェイト」

フェイトの力が無くなっていくのを感じる。

俺は握りしめる力を強めた。

「せっかくアリシアの記憶をあげたのに、

そっくりなのは見た目だけ、役立たずでちっとも使えない

私のお人形」

「最初の事故の時にねプレシアは自分の娘、

アリシア・テスタロツサを無くしているの。
彼女が最後に行なっていた最後の研究は使い魔とは
異なる、使い魔を超える人造生命の生成そして、
死者蘇生の秘術。フェイトって名前は、当時彼女の研究につけら
れた

開発コードなの」

エイミーが説明するが、今のフェイトにはどうでも良いことだろう。
今のフェイトには自分が本当のプレシアの娘ではなく、
作りものでしかないということだろう・・・

「よく調べたわね。そうよ、その通り。だけどダメね。

ちっともうまく行かなかった。作り物の命は所詮作り物。

失ったものの代わりにはならない。アリシアはもつと優しく
笑ってくれたわ。アリシアは時々わがママを言ったけど、

私の言うことをとてもよく聞いてくれたわ」

「やめて・・・」

なのはも、みんなも辛そうだ、だけど・・・

「・・・良いことを教えてあげるわフェイト。

あなたを作り出してからずっとね、私はあなたが

大嫌いだったのよ」

「おっと」

フェイトが崩れ落ちるが

俺が支える。

「私たちは旅立つの。忘れられた都・・・アルハザードへ!!」

「・・・話は終わったか？プレシア」

「ん？」

「お前に良いことを教えてやるよ。」

「良いこと？」

「アルハザードにも死者蘇生の技術なんかねえんだよ」

「！！お前何を知っていい」「全部だよ」「はあ？」

「お前がフェイトに鞭打ちをしていたことも・・・」

フェイトの心遣いを踏み躪ったことも、

アルフやフェイトがお前にされたことも全部知ってる」

「お前！何者だ！！」

「そんなことは関係ねえだろ。」

それに、お前はフェイトの母親だろうが・・・

母親なら、ちゃんと娘のことを見る！

亡くなった人の事ばかりを追いかけて、

今あることから目を反らすんじゃないやねえよ！

フェイトが人形？かりそめの器？そんなことだって

関係ねえんだよ！フェイトはフェイトだろ、例え人形だとしても

お前がこの世に生み出した紛れもねえお前の娘だろうがああ！！」

「それがd「それがどうしたと言っくんじゃねえよな」くっ・・・」

「フェイトはな・・・傷つきながらも、お前に笑ってほしくて、

痛い思いも我慢して、甘えたいことも、友達を作ることにも我慢し

て、

耐えて耐えて耐えて耐えて、お前のためにジュエルシードを

集め続けていたんだよ！」

「ボンゴレ・・・」

「ふっ・・・それでも私はアリシアとともにアルハザードへ」

「行っても無駄だぜ、アルハザードに死者蘇生は存在しない」

「そんな馬鹿な！アルハザードには」

「ああ、アルハザードには凄い技術が沢山あるさ」

「それならなぜ！？」

「あっても不老が限界だ。亡くなった命はどうすることも

「できやしないんだよ。」

そして、通信が途切れる。

「ボンゴレお前は何を知っている！」

うわぁクロノが絡んで来たよ・・・

よし、無視だ！

「なのはフェイトのことを頼む」

「う・・・うん」

「フェイトお前に言うておくことがある」

俺はフェイトの目を見た・・・

「俺がお前に出会う前からお前の事を知っていたよ。

それでも俺はお前の事を軽視したりしたか？

フェイトはフェイトだ。お前はここに存在して、

今を生きている。それだけだ。後はお前自身が自分で考えて

自分の気持ち通りに行動しな」

そして俺はフェイトの頭を優しく撫でる。

「んーじゃまあ行きますか」

俺は炎に包まれた。行き先はもちろん・・・

(プレシアの所に行くぞー！)

フェイトVSなのはゝ海の上の決闘（後書き）

無月「さすが白き魔王だな」

作者「デイベインド状態で、あのバカ魔力の砲撃は・・・な」

無月「言うな。寒気がする」

作者「お前もなのか・・・見た目は可愛いのにな」

無月「・・・」

ラブコメやめれ by ボンゴレ (前書き)

無月「なんかなー」

作者「なんだよ。また何かあんのか？」

無月「いやー、何か全力で戦いたいなーって」

作者「お前が全力で戦うと、中規模次元震が軽く起きるぞ」

無月「・・・自重します」

ラブコメやめれ by ボンゴレ

アースラ（内）side

「ボンゴレ君！！」

なのはがモニターを見たがら叫んでいた。

そこに居たのは、さっきまでそこに居たボンゴレだった。

「どうやってそこに！？それより、

さすがの彼でもあの量の敵の数には勝てない！」

「！！敵の数がどんどん減っていきます！」

「何！！」

全員がモニターを見る。

そこには沢山の氷の人形がロボットと戦っていた。

「な、何なんだあれは！？」

《おや？ようやく気づいたみたいだな》

「ボンゴレ！そいつらはなんだ！！！」

《こいつらは無敵の攻撃隊だ》
グルッポ・アタック・インヴェンチャービル

「無敵の攻撃隊？」

《こいつら一体一体が俺の素の戦闘能力を持っている。今召喚している数は30だ

まあ最大は800体だがな》

「君はバグキャラだな」

《そりやどうも。おや、こちらにも結構来たな・・・

雲・大空のVG、森・大地のSR起動。》

なのは side

(す・・・凄い。)

何十、何百ものロボットがボンゴレ君に襲いかかっているのに
いとも簡単に倒していく。

「こ・・・これは」

リンディさんの顔もみんなの顔も驚きで引きつっている。

近くにいるロボはトンファーで、遠くにいるロボは何かで地面に押
さえつけて

何かで切り裂いて撃破している。

「すみません。これが本当に魔法ランクDの人がやることなんでし
ょうか？」

「え・・・ええ。確かに魔力判定では、Dです」

エイミイさんがそう言っているけど、本人もかなり驚いている。

「私達も・・・私達も行きます！」

「・・・分かりました。貴方たちも行ってください」

「・・・私も、私も行きます！」

「フェイトちゃん!？」

フェイトちゃんが自らの意思でプレシアさんのところに
乗り込もうとしている。

「本当に行くの?」

「はい」

「そう。では行ってらっしゃい」

そして、私たち（なのは・フェイト・ユーノ君・アルフ・クロノ君）は
プレシアのいるところへと向かった。

無月side

「だっ~~~~もうメンデエエ　　！！」

「マスター頭いかれましたか？」

「アルフィン……今後一切人間化するのを禁止する」

「ええ……って、一度も許可してくれないではないですかマスター

！！！」

「はいはい……」

さて、九道路に向かうか、最下層に向かうか悩むなあ

「マスター。誰か来ましたよ」

「ん？」

クロノかこいつは確か最下層に向かっていたよ……

「ハアハア。ようやく追いついた……」

「ようクロノ。お前どうせ最下層に向かうんだろ？」

「だったらどうした？」

「俺も手伝ってやるよ」

「そうか、不意だが、お前の実力は身の染みているからな」

「え？あの時の技、本来の1割も火力出してないけど」

「……」

「まあいいや、さっさとここうぜ」

「あ、ああ（こいつとは戦いたくないな）

そして俺とクロノは最下層へ向かった。

なのはside

私はフェイトちゃん達と別れ、

九道路の奥で封印を施そうとしていた。

「防御は僕がやる。なのはは封印に集中して」

「うん。いつも通りだよ。ユーノ君いつも私と一緒にいてくれて、守ってくれたよね。だから戦えるんだよ。背中がいつも

あったかいから！」

「デイベインシューターフルパワーー！」

そして、振るうー！

「シューーーートー！！」

無月side

実は俺、最下層には行かなかった。理由は、なのはとユーノのラブコメを眺めたかったからだ！

あのとき、クロノになんかいろいろ言われた気がするが、きっちりなのはとユーノのラブコメを見ることが出来た。

さて、封印も終わったし、そろそろ呼びかけるか・

「おいそこのカップルさん」

「えっ。ボンゴレ君!？」

「君はクロノ君と一緒に最下層へ向かったんじゃ」

「いやー、なのはとユーノのラブラブっぷりを見たかったから
引き返してきたんだ」

「「ら、ラブラブ!? / / / /」

「何二人して動揺してるんだよ。やれやれ (、 (」

「ど、動揺なんてしてにやいもん!」

「なのは・・噛んでるよ・・」

「ごめん。ユーノ君」

「はいはいイチャイチャは帰ってからにしてください。

それにお互いに好き同士ならキスでも二人で熱い夜でも

過ごせばいいのに」

「ぼ、ボンゴレ君! いきにやにを言ってるの~~~~!! / / / /」

「そ、そうだよ、こんな時に不謹慎だ! / / / /」

「・・・さっきまでイチャイチャしていた奴らが言えた口かよ」

「マスターそろそろです」

「ああすまん、アルフィン」

「「アルフィン?」」

「ん? ああアルフィンは俺のユニゾンデバイスなんだ」

「ユニゾンデバイスだって! ?」

「ユーノ君、何なのそのユニゾンデバイスって?」

「ユニゾンデバイスっていうのh「おいそろそろ行くぞー」後で

話すよ」

そんじゃ、炎を使うか・・・

「開け」

ボワッ

「ここからフェイト達がいる最下層に行けるぞ」

「え・・・」

「いくぞー」

「お、おおー」

そして3人は炎の中に入り、炎に包まれた。

ラブコメやめれ byボンゴレ（後書き）

無月「そっだよ!!」

作者「どうしたんだ？」

無月「氷河のSRで無敵の攻撃隊を召喚して、

そいつらと戦えば良い修行になるんじゃないのか!!」

作者「……その手があったか!!」

これはフェイトのフラグか？（前書き）

無月「……………」

作者「どうした」

無月「ちょっと……な。フェイトとプレシアの

仲が良くなったのか心配だな」

作者「そっか」

これはフェイトのフラグか？

無月side

やばいな。地面の崩れが激しい。

「！不味い！！」

目の前には、地面が崩れ、落ちそうになっているアリシアとプレシアを支えているフェイトがいた。

「ちっ！間に合え！！」

俺は上空のV.Gで光速移動をし、プレシアの手とアリシアのポットの一部を掴んだ。

「ボンゴレ君！！」

「ふっ。プレシア。フェイトとの仲は治ったのか？」

「ああ。これからはフェイトとちゃんと向き合っよ……でも、もう無理みたいね。フェイト、ボンゴレ。手を離して逃げなさい」

「い、いや、嫌だよ……お母さん！！」

「……だつてさ！！」

俺はプレシアを一気に引き上げ、虚数空間へ落ちて行くこととするアリシアのポットの一部を掴み思いつきり、フェイトとプレシアに向けて放り投げた。

そして俺は……

「ボンゴレ君！？」

「フェイト。せっかく母親との仲が治ったんだ。これからの

人生を楽しめ！！その前にアリシア！お前は不治の病をなんとか治せ！！！！」

「ボンゴレ君！！！」

「フェイト。俺は大丈夫だ、心配するな」

そして俺は虚数空間へ落ちていった……

「ボンゴレーーーー！！！！」

フェイトの叫び声が聞こえた……。

(そおいえば俺、フェイトとプレシアの仲直りの際
立ち会えなかったな……残念)

アースラ(内) side

「無事に全員の転送が終わりました！」

「ボンゴレ……ボンゴレが……」

「フェイトちゃん、ボンゴレ君がどうしたの？」

帰ってきたときにはフェイトは泣いていた。

「ボンゴレ君が……母さんとアリシアを助けるために……

虚数空間へ……落ちた」

そのとき、この場に静寂が訪れた。

「て、庭園崩壊終了……」

フェイトもアルフも泣いていた。

「ボンゴレ……」

フェイトは泣き崩れていた。

「フェイト……ごめんなさい。私のせいで

あなたの大切な人を死なせてs「勝手に殺すな」えっ!!!」

そこには虚数空間に落ちたはずのボンゴレが居た。

無月side

「なっ……君は一体どうやって虚数空間から!」

「ん?あれは魔法を無効化にする空間だろ?

俺のやつは魔法じゃなくて炎。魔力じゃなくて精神力・気力を使うからな。もしかしたら俺だったら大丈夫なんじゃね?と思っ
つて

落ちて行っただけけど、まさか本当に大丈夫だったとはな。
ぶっつけ本番で確証が無かったから内心ヒヤヒヤだったぜ」

と、俺は笑いながら話す。

「……」

フェイトが俺の目の前に着た……

パアアン!!

俺は頬を叩かれた。

「いたたた・・・どうしたんだよフェイト」

「何やっているのよ・・・あなたが居なくなったら

悲しむ人が居るでしょ！帰れなかつたらどうするの！！」

フェイトは涙を流していた。

「・・・おいユーノ！俺って何かやばいことしたのか？」

「ええ！いきなり僕に念話で聞かないでよ！！」

「この役立たずなのはLoveのフレットが！！」

「え、ちよつ」

俺はユーノとの念話を切った。

「え・・・えつと・・・なんで怒っているのかな？」

フェイトさん（；・・）「」

俺は内心訳がわからずドキドキしていたが・・・

ギョッ

フェイトに飛びつかれ抱きしめられた。

フェイトは俺の胸で泣いていた。

「バカ・・・心配・・・かけないでよ・・・」

「う・・・ごめん？」

俺は取り敢えずフェイトの頭を撫でた。

「あ、そっいえば」

俺は高速移動でフェイトから離れ、プレシアの所へ行った。

みんなが驚き、フェイトが少し頬っぺを膨らましていた。

「さっきは助けってくれてありがとう」

「別に礼には及びません。あのぐらい誰にでも出来ることですから」

「……」「普通は出来ません……」「……」「……」

「ははっ……それで私に何かな？」

フェイトが物凄く睨んでいるんだけど……」

「いえ、プレシアさんの病気を治そうかと思ひまして」

「……これは不治の病だぞ！治せるのか！？どうやって」

「ええ、俺なら治せますよ」

どうやってって言われても俺の【答えを出す者】（アンサートーカ

ー）の

能力でそう答えが出ているからな。

「ど、どうやってだ？」

「まあ見てな」

俺はそう言い、両目を閉じた……

（【直視の魔眼】……発動。プレシアの病気を消す為、病気の歪みを見る）

「そこだ！」

俺はそう言い、ナイフでプレシアの病気の死点を断った。

「がはっ」

「ボンゴレ……」

「サイフォジオ！」

俺は即座にサイフォジオでプレシアを回復させる。

「貴様、何をしたのか分かっているのか!?!」

3下が何か言っているけど、無視

「どうだプレシア。前までしていた病気による症状がないだろ？」

みんな首をかしげていたが・・・

「!?!本当だ・・・体が軽い!深く息を吸い込める!?!」

「「「「「「「えっ!?!」」」」」」」

みんな俺が何をしたのか分かっていないみたいだからな
説明してやるか・・・

「俺がプレシアにしたことは、直視の魔眼で病気の死点を見て、
ナイフでそこを攻撃して病気の元を破壊。

そのまま治癒魔法で傷口を塞いだっていうことだよ」

「そんなことが・・・できるわけ」

「出来る訳無いなんて言うなよ。実際目の前にいる

プレシアの体は治ったんだからな」

さて、そろそろかな・・・

「それじゃあ俺はこの場から消えるとしよう・・・」

俺の体が燃え始める・・・

「まあフェイトとプレシアの処遇は

クロノが何とかしてくれるから安心しとけよ」

「勝手に決めるな！」

「待って。君の素顔と名前を」

「それは今はまだ教えられないな・・・」

「そういえば艦長に忠告したいことが1つだけ」

俺は艦長リンディの目を見つめる。

「これから、暫く経つと、4人の守護者が現れます」

「4人の守護者？」

「はい。その4人は闇の書の守護者で、魔力を集めるために活動を開始します。」

リンディの顔が強ばるのが分かる。

「それらの対応はそちらにお任せします。それでは」

そして、俺は・・・消えた・・・

これはフェイトのフラグか？（後書き）

無月「そういえば、前に神様を呼び出して、能力を追加してもらった時の

やつが、【直視の魔眼】・【答えを出す者】だったな」

作者「でもさ、お前のデフォの【マンガやアニメの能力を全て使用可能】って

いう能力があるんだから、追加で頼まなくても良かったのにな」

無月「……………いいんだよ!」

作者「（うわぁ…キレたよ）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9474z/>

魔法少女リリカルなのは～孤高の黒き剣士～

2012年1月3日01時05分発行